



薔薇の園



—The Rose Garden—

薔薇の園

アンストルーザー夫妻は、エセックス州にある、ウエストフィールド・ホールの居間で、朝食をとっていた。二人は、その日のプランを立てていた。

『ねえ、ジョージ。』と、アンストルーザー夫人は言った。『わたし、あなたがマルドンまで、馬車でいらしたほうがいいと思いますわ。そして、わたしが今いったような編み物類を手に入れることができるか、やってみて頂きたいの。それで、わたし、慈善市パザのわたしの陳列台を飾りたいの。』

『いいとも。マリイ。お望みなら僕は、無論出かけるよ。だが今朝は、ジェフリ・ウィリアムスン君と、一ラウンド「ゴルフ競技のひとまわり」やろうと思って、支度しかけてるとこなんだ。慈善市パザは、来週の木曜

までじゃなかったかね。そうだろうか?』

『それがなにになりますの? ジョージ。わたし、マルドンでほしいものを、手に入れられなかったら、あの町中の店という店へ、手紙を出さなくちゃならないくらい、察してくださいすってもいいと思いますわ。しかも、その店は、はじめっから、値段も品質も、まったく気に入らないものを送ってくるにきまっていますわ。ほんとうにウィリアムスンさんとお約束なすったのなら、そうなさるがいいですわ。だけど、もっと早くから知らして頂きたかったわ。』

『ああ、いやいや、ほんとうに約束したんじゃないよ。わかってるよ。行くよ。で、お前は一人でなにをするのだい?』

『まあ。うちの仕事が片づいたら、わたし、新規な薔薇の園を設計しなくちゃなりません。あなた、マルドンへお出かけの前、ついでに、わたしがきめておいた場所を見せに、コリンズ（下男）を連れて行っ

て頂きたいわ。御存じですわね。無論。』

『いや、はっきりは知らないよ。村のほうの、上手かみてのはしだったかな？』

『あら、ちがいますわ。わたし、よくお教えしてたと思っていましたに。——いいえ、教会のほうへいく灌木林の道から、ちよつとはなれたあのちいさな空地ですわ。』

『おお、そうだ。あの、以前にはきつと涼亭あずまやがあつたにちがいないと、二人で言っていた、あすこだね。朽ちた腰掛と杭くいのあるとこだね。だが、あすこは、日あたりがいいかな？』

『あなた。失礼ね。わたしだってすこしは常識をもっていますわ。』

涼亭なんか思い出したくらいあなたの考えで、わたしを信用して頂きたくはないわ。ええ、むろん日光はたっぷりあたりますとも。あの黄楊つげの茂りを取りのければね。あなたが仰有ろうとすることは、わか

っていますわ。だからわたし、あなたに、あすこを裸に切りはらって
くださいなんて、お願いしませんわ。わたしただコリンズに、一時間
たってわたしが行く前に、腰掛や杭やそのほかのものを、すっかり取
り払ってもらいたいのですわ。そしてあなたには、すぐ出かけて頂き
たいの。間食^{ランチオン}「朝食と昼食のあいだの間食。」のあとで、わたし、教
会のスケッチをしようと思えますの。だから、まあそのあいだ、あな
たはゴルフ・リンクにおいでなすってよろしいでしょう。』

『や、そいつはうまい考えだーまったく！じゃあ、お前は絵をかく
がいい。そのあいだ、一ラウンドやって来よう。』

『あなた、主教さんにお話しなさるかとも、思うんだけどーけれど、
あの方の御意見をきいたところで、わたしの絵には、なんのたしにも
なりませんわ。さあ、早くお支度なさいよ。でないと、午前中の半分
は過ぎてしまいますよ。』

アンストルーザー氏の顔は、ほぐれるように見えたが、またグツと固くなった。いそいで部屋を出たが、すぐ廊下でなにか命じている声が聞えた。アンストルーザー夫人は、かれこれ五十歳にはなろうという、堂々たる主婦ぶりで、朝の書翰に二度目を通したあと、家事を処理しはじめた。

二三分のうちに、アンストルーザー氏は、温室でコリンズを見つけた。二人は、薔薇園が計画されている場所へ連れ立った。筆者は、こんな樹苗床ナースリーに、もっとも適しているという条件については、多くを知らない。だが、つねに“偉大なる花作り”だと自認しているにしても、アンストルーザー夫人が、目的に対する好適の地を選ぶ上に、かなり誤ちのあったことは、信じていいような気がするのである。

そこはちいさな湿気のある空地で、一方は道で区切られ、もう一方は茂った黄楊林フナギや月桂樹や、そのほか常緑樹が境をなしていた。土地は

ほとんどまる裸で草もなく、あたりの様子は小暗く陰気だった。素朴な腰掛や、朽ちて皺しわばんだ檜の杭が、空地のまんなかあたりに残っているの、ここには嘗て涼亭が建っていたのだと、アンストルーザー氏は推測したわけだった。

コリンズは、この土地についての夫人の計画を、べつに、なんとも思っではいなかった。で、アンストルーザー氏から、その話を聞かされた時にも、平気な顔をしていた。

『ええ、すぐ、すっかり腰掛なんか取り払っちゃいましょ。』と、彼は言った。『こんなものは、ここの飾りでもありませんし、また、ひどく腐っちゃってますからね。ごらんなさい。』と、大きな木片をぶちこわしながら、『すっかり腐りがまわってまさあ。ええ、手もななく取っ払えますよ。』

『そして杭も抜かなくてはな。』と、アンストルーザー氏は言った。

コリンズは仕事をつづけた。両手で杭をゆすぶった。途端に頤をすり剥いた。

『「いつ、地びたに、しっかと喰いこんでいます。』と、彼は言った。『「いつは、なが年、ここにあったんですよ、旦那。でも、腰掛のように、おいそれと取っ払えないようですよ。』』

『だが、奥さんは、どうしても一時間のうちに除けてほしいと言って
いるのだよ。』と、アンストルーザー氏は言った。

コリンズは、軽く笑って、ゆっくり頭を振った。『駄目ですよ。旦那だっておわかりでしょう。誰だって、できねえものはできねえんです。ね、そうでしょう？まあお茶時ちやびき「午後五時」までに抜きましよう。うんと掘らなくちゃなりません。旦那がおっしゃるのは、まあ、もつと言わして頂けるなら、つまりこの杭のぐるりの土を、ゆるめることなんでさあ。それはわたしと倅で、すこしの間働けばいいんですよ。

だが、ここに^二にあるこの腰掛です。』と、コリンズは、自分の工夫力を、薔薇園の計画のこの部分に適用するように見せかけながら言った。『これはまあ、おまかせくださるなら、柵をくぐって、みんな取っ払います。今から一時間とたたないうちにね。ただー』

『ただーなんだい？コリンズ。』

『ええ、それはね、それは、旦那にとっても、御自身やーそのほかのどなた（この「どなたも」はいささか口早やに加えられたが）もお逆らいなさらないと同じに、わたしにとっても、言いつけられたことに、お逆らいするわけじゃございませぬが、どうもここは、わたしなら薔薇をつくるために選ぶ場所じゃございませぬ。だって、その黄楊^{つげ}や莢^{がま}蒨^{ずみ}を^ごらんない。どんなにこいつ等が、いっぱし日光を遮ぎるでしよー』

『ああ、そりゃあそうさ。だから、こいつ等をすこし取り除けてし

まうんだ。』

『そりゃあ、たしかに、取っ払いさえすりゃあね！ええ、たぶん、そうすりゃあですがーねえ、旦那ー』

『しかたがないさ、コリンズ。わしは今、乗って行かなくちやならない。入口へ奥さんの馬車が来たようだ。奥さんが、してもらいたいことをこまかに説明するだろう。わしは、奥さんに言っておこう。お前が、腰掛はすぐ取り除けたが、杭は午後でないと駄目だっことをね。じゃあ、それでは。』

コリンズは、頤をさすりながら残った。そこへ来たアンストルーザー夫人は、主人の言葉をきいて不満らしかった。だが、プランを多少変えることについては、かれこれ言わなかった。

その日の午後四時まで、夫人は良人おっとをゴルフへ遣った。コリンズをうまくあしらい、その日のほかの勤めも、きちんとやってのけた。そ

してきめた場所へ、キャンプ椅子と日よけ傘をもたしてやって、灌木から見られる教会の見取図にとりかかった。そこへ女中が、急ぎ足に道をおりて来て、ウイルクンス嬢が、訪ねて来られたと知らせた。ウイルクンス嬢は、二三年前、アンストルーザー夫妻が、このウエストフィールズの地所を買ったが、その家族の残る一人だった。彼女は、今まで地所の近くにとどまっていたのであるが、これは最後の別れの訪問らしかった。

『ウイルクンスさんに、ここでお目にかかりたいって、おねがいなさい。』

と、アンストルーザー夫人は言った。そしてすぐ、ウイルクンス嬢は、やって来た。もういっばしな年齢の女性だった。

『ええ、明日ここを出発しようと思いますの。わたくし、兄に、あなたがこの土地を、どんなにがらりとお変えなすったか、話してやり

ましよう。無論兄は、以前ここに建っていた、あのちいさな家を、惜しいことだと悲しむでしょうーわたしだって、そうですけれど。でも、花園のできるのは、ほんとに嬉しうございますわ。』

『そう言っ頂けば、あり難いですわ。でも、まだまだ、改良が終ったとお考えなすってはいけません。どこへ薔薇の園をつくるか、ごらんに入れましよう。ついこの近くですの。』

設計案の細目が、ウイルキンス嬢の前に、長くひろげられた。だが、嬢は、あきらかに、ほかの場所を考えていたようだった。

『ええ、結構ですわ。』と、彼女はむしろうつかりしたように言ったが、『でも、おわかりでしょう。わたしなんだか、むかしの事を考えていましたわ。わたし、あなたが手をお入れになった前の、ここの姿を、もう一度見とうございますわ。弟のフランクとわたしは、この場所に、なによりの思い出があったのですわ。』

『ほう?』と、アンストルーザー夫人は、ほほえみながら、『それはどんなことだか、聞かして頂きたいわ。なにかきつと珍らしい、チャーミングなことでしょう。』

『べつにチャーミングではありませんわ。でも、いつもわたくしには、奇妙に思われるのですわ。』

そして、ウイルキンス嬢は語りだした。――

『子どもだった時分、わたしとフランクは、いつだってニコへ、――人で来るってことはありませんでした。それを今、ある気分つてもものの中で、考えようとしたって、どうにもなりません。それは――すくなくとも、わたくしにとっては――言葉ではいうことのできないようなものです。そして、言葉でいうにしても、その言葉が正当にいいあらわさなかったら、むしろばかげてひびくようなものなのです。わたくしは、それが、二人に与えたものがなんだったか、どうにかお話しでき

ます。―そう、つまり、わたし達が一人でここにいたら、なんだかひどく怖こわくってならないのでした。ある秋の、大変暑い日の夕方ちかくのことでした。フランクが、この庭園のあたりで、まるで神隠しにでも会ったように、見えなくなりました。わたしは、彼と、お茶〔午後五時が習慣的喫茶の時間。〕に連なつて帰ろうとして、さがしまわりました。そしてこの道を下りて行きますと、突然、彼を見つけました。わたしは、彼が、茂りの中にかくれたのだと思つていたのですけれど、そうではなくて、彼は、古い涼亭あずまや―ここに、木造の涼亭あずまやのあつたことは、御存じですわね―の隅っこにあるベンチにもたれて、眠っていました。その顔は、いかにも恐ろしげな様子で、わたしは、てっきり、彼が病気が、いや死んだのではないかと思つたほどでした。わたしは、飛んで行って、ゆすぶつて、お起きなさいよと言いました。ところが、彼はワツと叫んで眼をさしました。彼は、たしかに、恐怖で気が狂つ

ているようでした。彼は、わたしの手をとって、家のほうへ駆け出しました。その晩中、おどおどしていて、まるで眠りませんでした。わたしのおぼえているかぎりでは、彼のそばに誰か寝ず番をしななければならなかったのです。間もなく、彼はよくなりましたけれど、二三日の間、わたしは、どうしてそんな状態になったのか、彼から聞き出すことはできませんでした。とうとうわかったことは、彼がほんとうにベンチで眠って、実にふしぎな、とりとめもない夢を見たということでした。その話によりますと、彼は、決して自分のぐるりにあったものを、見たのでなく、その光景を、ほんとうに生き生きと感じたのです。はじめ、彼は、多勢の人のいる大きな部屋に立っていたと知ったのでした。そして彼に向き合っている人は“いかにも強そうな”人で、彼は、その人から、いかにも重大だと感じられるような数々の質問を、しかけられたのでした。で、彼が質問に答えをする毎に、誰

か―部屋の途中で彼と向き合っている人か、そのほかの人かが―なんごとか、彼に反対するように思われたそうです。どの声もみなずいぶん遠くから、かすかに響いて来るのでしたが、彼はそれをすこしばかりはおぼえていました。“お前は十月十九日には、どこにいたか？”とか、“この筆蹟はお前のか？”とかいったことを。わたくしは、彼が、むろんなにか裁判をうけた夢を見たのだと、今でもそう思います。ですけれど、その書類があるわけではなし、そして、その頃八歳だったフランクが、法廷で行われたことを、そんなにいきいきとおぼえていたなんて、ふしぎでしたわ。彼の話では、その間ずっと、大変な心痛と圧迫と絶望を―こんな言葉を彼がその時使ったとは思いませんけれど―感じたというのでした。それから、しばらくは、彼はおそろしくおどおどして、しおれ切っていたのでしたが、こんどはまた夢が別の光景になりました。彼は自分が、戸口から、ところどころ雪のある、

暗い、あけきらない夜明けの中へ踏み出したことに気づきました。それは街だったか、とにかく、家並の続いている場所で、彼は、そこにもまた多勢の人がいることを感じました。そして、なんだかギシギシ軋きしむ階段をのぼらされ、ひろい台の上へ立たされたのでした。ついちかくに、ちいさな火が燃えているのだけが、はつきり見えました。すると彼の手をつかんでいた誰かが、その手を放し、火のほうへ行きました。彼の話では、ここが夢の中で、一層恐ろしいものだったのだそうで、もしわたしが揺り起さなかったら、自分はどうなったかわからないと、言うことでした。子どもの夢にしては、奇妙な夢ではなかったでしょうか？ええ、いかにも奇妙な夢ですわ。―その年の、暮れぢかくだったと思います。フランクとわたしは、ここで遊んでいました。わたくしは、ちょうど夕方頃、涼亭ちんの中で腰かけていました。お日さまが落ちはじめたので、わたしはフランクに、おうちでお茶の支度が

できているか見て来てください、その間に、読みかけている本を、その章の終りまで読んでしまおうからと言いました。フランクは走って行きました。思ったよりも手間どりました。お日さまはぐんぐん沈むので、わたしは、よく読もうと、本の上に身をかがめました。すると、その途端、涼亭あずまやの中で誰かがわたしに、ささやいたように感じました。たしかに聞いたー聞いたと思っただけー言葉は、なんだか、“引っ張れ、引っ張れ。おれが押す、お前引っ張れ”と、という言葉のようでした。ウイルキンス嬢はなお話をつづけて、

『なにが知ら恐ろしくなって、わたしは飛びあがりました。声はーささやきよりも、もっと小さかったのですけれどーいかにもしやがれた、怒りっぽい響きをもっていました。しかも遠い遠いあちらからーちようどフランクが夢の中で聞いたようにー聞えて来るのでした。でも、びっくりはしましたけれど、わたしはしっかりと勇気を出して、あ

たりを見まわしました。声がどこから来るのか、知ろうとしました。そして―声は、いかにものろまげで、でも、事實は事實ですけれど―わたしは、その声が、腰掛の端にあつた古い棒っ杭に耳をくつつけると、いちばん強く聞えることを確めました。だから、わたし、その棒っ杭に、しるしをつけたことは、おぼえていますの。―お裁縫籠から鋏を出して、できるだけ深くしるしをつけましたの。なぜそうしたのか、自分でもわかりません。そう、どれがあのかの棒っ杭だったか……お、それでしようよ。その上にしるしや搔き痕がありますわ。―でも、一つはわかりませんわ。ともかく、アンストルーザーの奥さま。あなたがいらっしゃる、そのそのこの棒っ杭と、まったく同じでしたわ。わたしの父は、フランクとわたしが、涼亭で怖い目こわに会つたことを知りました。そして父は、ある日夕御飯のあと、自分でここへ下りて来て、急に涼亭を抜き倒してしまいました。わたし、その時のことを思い出

しますわ。父はここで、よく臨時雇いに使った爺さんと話をしています。爺さんは、“旦那、あんなことを恐れないだっつていいでさあ。あいつはここん中に、しっかと押へられてまさあ。誰もあいつをよそへ移したり、飛び出させたりしなきゃあね。”と言いました。わたし、それがなんだか訊いたのですけれど、うやむやに返事をされたただけでした。きつと、わたしが大人だったら、父なり母なりから、ずっとくわしい話を聞くことができたでしょう。でも、御存じのように、父も母も、わたし達がまだまるで子どもの時分、死なくなつてしまいました。ほんとうに、あの事はいつもわたしには、奇妙に思えますの。で、わたしは、幾度か村の老人達に、なにか珍らしい話を知っているかどうか、たずねてみました。けれど、その人達は、なにも知っていないか、言おうとしないかにきまっています。—おやおや、子どもと時代の思い出で、御退屈さま！でもあの涼亭は、一時、わたし達のむやみに

気になってならないものでしたわ。こうした、わたし達が勝手にあとさきを揃えたお話が、お気に召しましたか知ら。―では、アンストル―ザーの奥さま。もうお暇いたさなくてはなりません。この冬、この町でお目にかかりたいものですわね。』

こうして、ウイルキンス嬢は、去った。腰掛と杭も、その夕方までには、すっかり取り除かれ引き抜かれてしまった。夏過ぎんとする天候は、誰も知っているように、からだ工合にはよくなかった。そのせいか、夕食の時、コリンズのおかみさんがやって来て、ブランデーをすこし頂きたいといった。コリンズがひどい悪寒さむけに襲われているので、明日はうんと働くことができまいというのだった。

翌朝アンストル―ザー夫人の目ざめは、まるで穏かではなかった。彼女は、昨夜、なにか悪い奴が、あの植附け地へはいり込んだにちがいないと良人おっとに話した。

『そしてもう一つ用事があるの。コリンズが仕事にかかったら、梟をどうにかしてほしいと言って頂きたいの。昨夜も一匹やって来て、ちようどこの窓のそとに棲とまりましたわ。もし部屋へでもはいって来たら、わたし、面くらって大騒ぎしたでしょう。あの鳴き声から考えても、よほど大きいのにちがいませんわ。あなたは聞かなかったの？ええ、そうでしょう。いつもの通り、ぐっすり眠っていらしたもののね。でも、ジョージ、昨夜はあなたもなんだか寝苦しそうに見えたわ。』

『そうだよ。僕はお前の夢とは別もので、ぼんやりさせられたように感じるよ。お前は僕が見た夢を想像もしまい。その夢は、目がさめたらどんな夢だったか話すことができなくなった。もしこの部屋が、こんな日に日がさしこんであかるくなかったら、僕は今だって、その夢を思い出す気にならないくらいだよ。』

『まあ、それはほんとうに変だわ。あなたは、きつとーええ、きつ

と昨夜、わたしが見たと同じ夢をこらんなすったのよ。あなたはあの碌でもないクラブ・ハウスで、お茶をおあがりになったでしょう？どう？』

『いいや。お茶を一杯と、バタをつけたパンをすこし口に入れただけさ。どうしてあの僕の夢ができあがったのか、ほんとうに知りたいのだ。―僕は夢が、見たり読んだりしたたくさんの小さな事から、できあがるんだと思っているんだがね。ね、メリイ、嫌でなけりや聞かしてもいいが―』

『どんな夢だったか、ぜひ聞かして頂きたいわ。すっかりお聞きした上で、わたしの夢もお話ししますわ。』

『では話そう。あの夢は、ほかの悪夢おそわれとはまるつきりちがっていたよ。と言うのは、夢の中で僕に話しかけたり触さわったりした者を、ほんとうに誰も僕は見る事ができなかつたんだし、しかも、僕はその事

実を、実に恐ろしく記憶しているんだからね。―はじめ僕は腰かけていた。いや、あるきまわっていた。そこは、なんでも古風な、鏡板のはめこんである部屋だった。おぼえているが、そこには炉があつて、その中にたくさん紙がくべてあつた。そして僕は、なんだか知らないが、非常に不安な気持でいた。すると、ほかの誰か―下男だつたと思うが、僕はそいつに、“馬だ。できるだけ早く”と言いつけたようにおぼえている。そしてちよつと待っていた。つづいて僕は、五六人の男が、階段をのぼつて来る足音を耳にした。板張りの床ゆかに拍車うちまわがガチヤガチヤ響いたかと思うと、ドアが開いた。そして、それは僕が、そうなるだろうと予期したものだつた。』

『ええ、で、それはどんなことでしたの？』

『それは、言うことができない。一種の衝撃シヨックだつたのだ。お前が夢をめちやめちやにってしまったのだ。お前が僕を揺り起したか、でな

ければなにもかもが、まっ黒に見えなくなったかだ。それが僕に起ったことさ。―それから、僕は、暗壁でかこまれた大きな部屋にいた。ほかの部屋と同じに鏡板をはめこんだ部屋だったと思う。たくさん人がいた。そして僕はたしかに―』

『あなたは、訊問に立たされていたのでしょう？ジョージ。』

『そう！そうだったよ、メリイ。お前もまたそんな夢を見たのかね！どうもふしぎじゃないか！』

『いいえ。わたしは、よく眠っていなかったので、そんな場面は見ませんでしたわ。ずっと話して「らんなさい。わたしはあとでお話しますから。』』

『そうかね。では言うが、僕は訊問されていたんだよ。その場の様子では、生命いのちにかかわることだったにちがいがなかった。誰も僕のために弁護してくれる者はなかった。そして、どこかそのあたりに、ほんと

うに恐ろしげなやつがーベンチによりかかっていた。僕は言うが、そいつは実に不公平に僕に喰ってかかるんだ。僕が答えることは、みんな曲解しやがって、まったく言語道断な訊問を行おうとしやがるんだ。』

『どんなことを?』

『僕がどこそこの場所にいたという日附を訊いたり、僕が書いたと思われる手紙のことを問うたり、またなぜ僕が或る書類を破ったかとか、たずねたりするのだ。思い出すが、そいつは僕が、どうにか答えると、へんに笑やがるんだ。それで僕はまったく萎縮してしまった。笑い声は高くはなかった。だが、メリイ、それはその時には、実に凄ごかつたよ。僕は確信するが、ああした奴は、嘗てあすこにいたにちがいない。そして、もっとも恐るべき悪党だったにちがいない。そいつが言ったことは――』

『ありがとう。それは仰有らないでもいいわ。わたし、いつか自分でゴルフ・リンクへ行ってみますわ。で、夢は、どんなふうにおしまいにしましたの?』

『うむ。僕に背を向けてね。そいつは、その方を見たんだ。そのあとで起った緊張した有様はぜひ聞いてもらいたい。僕には数日間も続くように思われるんだ。僕は待ちに待った。そして時々、僕にとって非常に重大だと思われることを書いた。そして返事を待ったが、誰も来なかった。それから僕はそとへ出た—』

『まあ!』

『まあ、だって?お前は僕が見たことがわかるのかい?』

『それは暗い寒い日で、街には雪があつたでしよう?そしてあなたのどこか近くで、火が燃えてたでしよう?』

『やつ!その通りだ!お前も同じ悪夢おそわれを見たんだ!ほんとにそうだ

ろう？うむ。なんともふしぎ千万だ！—そうだ。僕はたしかに大逆罪で死刑に処せられたのだと思うよ。僕は藁の上に転がされていた。そして、あさましくも揺り落された。それからなにか階段をのぼらなくちゃならなかった。誰かが僕の腕をつかんでいた。僕はちよつとばかり梯子を見たと思う。多勢のガヤガヤする音を聞いたと思う。僕は、その群集の中を通りぬけてゆき、彼等の話している騒ぎを聞くだけの我慢ができたとはとても考えられない。だが、幸い、その事実にとらなないで済んだ。夢は僕の頭の中で、雷のようなとどろきとともに、消え失せてしまった。だが、メリイー』

『あなたがきこうとしてらっしやることは、わかりますわ。わたし、これを一種の伝心術の例だと思えますの。ウィルキンスさんが昨日わたしにお別れを言いに来られましたの。そしてここに住んでいた子どもの時分、弟さんが或る夢を見たというお話がされました。昨夜わた

しが、あの恐ろしい梟の声で目をさました時、そしてあの人達が灌木の中でガヤガヤ笑っていた時（ついでに言いますが、あの人達がなにかあすこを荒しはしなかったか、あなたに見て頂きたいの。そしてそうだったらそのことを警察に届けて頂きたいの）、なんだか、わたし、ウイルキンスさんのお話を、考えないではいられませんでした。だから、そのわたしの頭の中の考えが、眠っていらっしやるあなたに伝わったにちがいないと思いますわ。ほんとうにふしぎです。そしてわたしが、昨夜あなたを苦しめたことを、お詫びしますわ。あなたは今日、できるだけ多く新鮮な空気にお触れなさるがいいですわ。』

『いや、今はもうすっかりいいよ。だが、僕は小屋コッブへ行こうと思う。誰かとゴルフをやってみようと思う。で、お前はどうするね？』

『わたし、午前中はしなければならぬことが、たっぷりありますわ。午後は、差し支えのない限り、スケッチをしようと思います。』

『そうかね。ーできあがったらぜひ見せてもらいたい。』

それで話はすんだが、灌木林の中は、べつになんら荒されてはいなかった。アンストルーザー氏は、薔薇園の場所を、ほんの興味で検分した。そこには、ひき抜かれた杭が、投げ出されたままになっていた。その穴の跡も、そのままになっていた。コリンズの様子をきいてみたら、やや元気にはなったが、まだ仕事に出かけることは、とてもできないことがわかった。コリンズは、おかみさんの口を通じて、自分が杭を取り払ったことが、なにかあやまちをおかしたことになるように望んでいると言った。おかみさんはさらに言葉を添えて、ウエストフィールドには、たくさんおしゃべり屋さんがいたが、たちのわるいのは、頑固な連中だと言った。おかみさんは、ほかの人よりもずっと長く、この教区にいるそうした連中の、いろんなことを考えているようだった。だが、彼等の語るところを総合しても、コリンズをまっ

たく悩乱した事実以上を、たしかめることはできなかつた。彼等の言うことは、ほとんど埒もないナンセンスだつた。

間食ランチと小時間の仮睡とで氣力を恢復したアンストルーザー夫人は、例の灌木林から、教会の墓地の側門が見わたせる道に画椅子を置き、心地よく腰を据えた。あたりの樹々や建物は、夫人の好画題だつた。で、ここで夫人はこの二つを充分研究した。夫人は制作に没頭した。太陽が西のこんもりした丘に遮ぎられる頃まで制作することは、考えてみれば実にたのしいこととなるのだつた。夫人はなお精出して仕事した。だが、日光はズンズン暗くなつたので、仕上げの筆は、どうしても明日ということになつた。しばらく、西の空の澄み切つた緑を鑑賞しながらひと息入れて、夫人は立ちあがり、わが家のほうへ踵を返した。それから小暗い黄楊つげの茂りを通りぬけ、芝生の上へ出る道の前まで来た時、また足をとめて、静かな夕暮の風景をじっと眺めた。そしてク

ツキリと空に区切られたものは、教会の一つの塔にちがいないと、心にとめた。その時、一羽の鳥（他分そうだったろう）が、左手の黄楊っげの茂の中でガサガサ音をたてた。夫人はなに心なく振り向いたが、妙なものを見てびっくりして飛びのいた。はじめは、十一月五日の祭の仮面めんをかぶった者が、枝の間からのぞき出したのだと思った。夫人は近かづいて見た。

それは仮面ではなかった。それは顔―大きな、すべすべした、ピンク色の顔だった。夫人は、はつきり知った。―その額からは、小粒の汗が流れ出していたこと、頤髯はきれいに剃られ、目を閉じていたことを。また夫人は、正確に、いつも考えずにはいられないくらい正確に、その口がどんなにパクツと開いていたか、たった一本の歯が、上唇から垂れていたかを知った。夫人に見られて、その顔は、茂りの暗がりへスツとひっこんだ。―夢中に走って、夫人は家に飛びこんだ。ドア

をしめるなり、へたへたとなつてしまつた。

アンストルーザー夫妻は、一週間以上、ブライトンで休養した。そこで彼等は、エセックス考古学会から、回章を受取つた。それは彼等がなにか歴史的な肖像画を所蔵してはいはないかという、訊きあわせだつた。もし所蔵があれば、学会の保護のもとに出版さるべき、エセックス肖像画集の、来るべき計画に加えたいからというのだつた。なお、学会の秘書からの手紙が添えてあつて、つぎのような文句が書かれていた。――

『学会にては、ここに同封致し置き候写真の原版を、貴下が御所蔵せらるるにあらずやと、特に期待致し居り候。御覧の如く、この人物××卿は、チャールス二世下の最高法院長にて、貴下が必らずや御承知の如く、その失権後、ウエストフィールドに隠退し、慚愧痛恨のあまり逝去せられたりと想わるる人物に有之候。現時、この珍らしき記

録が、ウエストフィールドにあらずしてプライア・ルーシングの登記簿にて発見せられし事は、貴下にも興味を感じらるべしと存じ候。その結果、右人物の死後、教区は甚だしく困却し、ウエストフィールド教区長は、すべてルーシングスの僧を招集し、この人物を供養致し候。発見せられたる記録の末尾には、“杭は西方ウエストフィールド教会墓地に隣接せる野にあり”としるされ居り候。貴下の教区に行われおる、この事実に関する口碑伝説を、御知らせたまわらんにはと期待仕り候。』

ところで、この“同封された写真”を一見するに及んで、アンストルーザー夫人は、猛烈な衝撃シヨックをうけるといふ事件が起つた。そのため、夫人は、この冬、外国旅行をしなければならぬことになった。

アンストルーザー氏は、所要の整理をするため、ウエストフィールドに帰った。その時、氏は、当然、一人の老教区長に、今までの話を

うちあげた。だが老教区長は、ほとんど驚きの色をあらわさなかった。彼は言った。

『実は、わたしも、この話の筋については、自分でいろいろまとめてみたのでした。半ば土地の古老に聞き、半ば自分であなたの所有地を探索したのでした。無論、わたし達も、或る程度、苦しめられたのでした。そうです。はじめの頃は、いけなかつたです。あなたのお話のように、梟のようなものや、人々のしゃべる声が時々しました。しかも或る晩には、この園にいるかと思えば、他の晩にはあちこちの小屋のあたりをうろつくのです。だが、近頃は、さっぱり見かけなくなりました。それでわたしは、あれがすっかり業ごうが滅めしたと想像していたのです。過去帳のほかには、そして長年わたしが、家訓だと考えていたもののほかには、なんの記録もありません。ですが、よく調べてみて、とうとうその家訓が、後人の手で書き加えられたものだということに

気がつきました。そこには、十七世紀中に物故した、教区長の頭文字イニシアルスがあるのです。A・C・ーつまりアウグスチン・クロントンというね。ここにその家訓があります。ごらん下さい。ー*quieta non movere.*（静かなるものを、動かすなかれ）ーそこで、わたしは思うのですがーええ、思うといっても、それを正確に言うことは、どうもまあむづかしいですな。』